

# 大学の基本情報から読み解く大学の特質

## － 世界の有力大学の分析を事例として－

船守 美穂 （東京大学国際連携本部）

- ・ グローバル化の進展とともに” World-class University” を追求する動きが世界各国で強まっている。各種の世界大学ランキングが世界共通の座標軸を与え、この指標の一つ一つに対応することが” World-class University” となるための条件とみなされる。
- ・ ” World-class University” として想定されているのはハーバード大学や MIT、UCB<sup>1</sup>、オックスブリッジ<sup>2</sup>など世界大学ランキングで常に首位に座する大学である。しかし、これらの大学はそれぞれに固有の個性と特色を有し、追求すべき単一のモデルを提供しない。
- ・ ここでは大学の基本情報からこれら世界の有力大学の特質を読み解き、一般に仮想されている” World-class University” 標準モデルは存在しないことを示す。そして各大学や高等教育研究者に積極的なデータの活用と、客観的な事実認識を呼びかける。

### はじめに

グローバル化の進展とともに” World-class University” を追求する動きが世界各国で強まっている。学生や教員などのアカデミアや教育プログラム、あるいは大学そのものが国境を越えて移動するようになり、各国の大学が世界的な規模で競争を強いられるようになってきたことが背景にある。これは欧州や米国で特に顕著である。日本をはじめとするアジアやその他の人の国際的移動が大きい地域はまだそれほど世界規模の競争に巻き込まれていないが、国際的な競争力やプレゼンスの強化の観点から” World-class University” がやはり追求されている。

” World-class University” の定義は定かではない。イメージされているのはハーバード大学や MIT、UCB、オックスブリッジなど世界大学ランキングで常に首位に座する大学である。これら大学を母体とした” World-class University” 標準モデルが仮想的に想定され、追求されている。” World-class University” 標準モデルを現在定義づけているのは、各種の世界大学ランキングが提供する指標である。ピア・レビューや論文数、論文引用度、教員や学生の外国人比率、学生／教員比率、リクルーターズ・レビューなどの指標に対応することが” World-class University” となるための条件とみなされる。

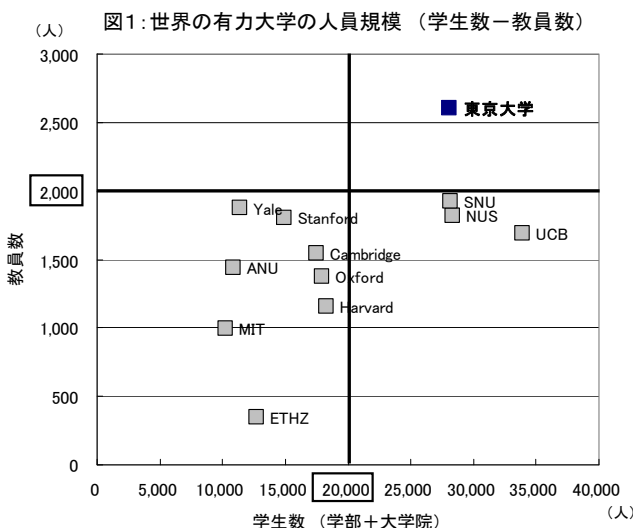
他方、ハーバード大学や MIT、UCB、オックスブリッジなどの大学が皆、同じであるとは言い難い。ハーバード大学や MIT などの米国の私立大学と、UCB などの州立大学、800 年以上もの歴史がありカレッジ制度を残す英国のオックスブリッジが同じ性格を有するはずがない。設置形態の観点からだけでなく、擁する学問分野や輩出する卒業生も大きく異なる。人文や社会科学に強いオックスフォード大学、自然科学に強いケンブリッジ大学、工学系に強い MIT、法科やビジネスなどの専門職大学院に厚いハーバード大学など、それぞれに特色を有する。

ここでは教職員や学生の構成、財務構造など大学の基本的なデータからこれら世界の有力大学の特質を読み解く。上に挙げたような大学の特色がこのデータ分析を通じて裏付けられる。同時にこのデータ分析は、世界の有力大学がそれぞれに異なり、” World-class University” 標準モデルが存在しないことを厳然と示す。

本分析は世界の有力大学を対象としているが、世界の有力大学でなくとも大学にはそれぞれの大学ごとに特色や個性がある。本分析を通じて、個々の大学や高等教育研究者に、大学運営や高等教育研究を追求する上での積極的なデータの活用と、客観的な事実認識を呼びかけたい。

### 世界の有力大学の特質の分析

教職員や学生の規模や学問分野別の構成、財務構造など大学の基本的なデータから世界の有力大学の特質を分析した。大学の教育機能の特色や擁する学問分野の特色、社会連携面の特色などが分析の視点である。ここでは紙面の都合上、分析の手法や範囲を示すことができない。以下に、大学の教育機能



<sup>1</sup> UCB: カリフォルニア大学バークレー校

<sup>2</sup> オックスブリッジ: 英国のオックスフォード大学とケンブリッジ大学を指す。

の特色を中心に結果の一部を紹介する。

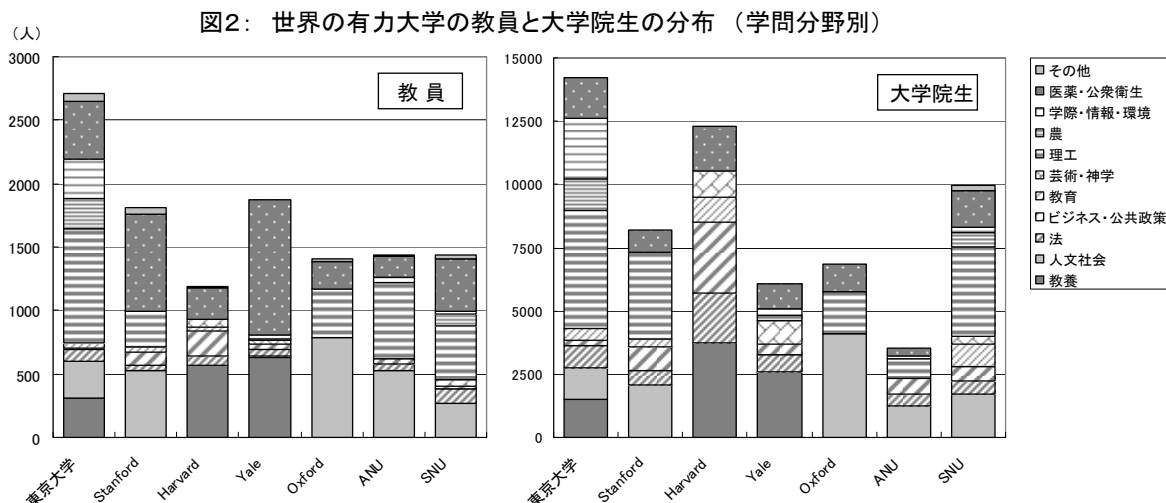
### a. 大学の教員・学生規模と設置形態

図1に示すのは各大学の教員・学生規模である。東京大学は教員数、学生数ともに規模が大きい。UCB、シンガポール国立大学(NUS)、ソウル国立大学(SNU)は学生規模が大きいが教員規模はそれほど大きくない。これら大学は州立あるいは国立大学であり、地域または国の高等教育を担うために設置された大学である。このため学生規模が大きいと推察される。米国の私立大学や中世に創設されたオックスブリッジ、科学技術の特別立法により設置されたスイス連邦工科大学チューリヒ校(ETHZ)や当初、大学院大学として設置されたオーストラリア国立大学(ANU)は総じて規模が小さい。

### b. 大学の学問分野特性と教育機能

図2に教員と大学院生の学問分野別の分布を示す。この分布は学問分野別に分類した部局ごとの教員および学生の在籍者数から求めた。学部・研究科ごとに在籍する教員・学生数を公表している大学が少ないため、比較できる大学が限られている。東京大学とオックスフォード大学は教員と大学院生の学問分野別の分布が類似している。米国の私立大学は両者の分布が類似していない。医学系の教員や、専門職大学院に在籍する大学院生が目立つ。これら米国の有力私立大学の学生の分布を学部・大学院別に比較(図不掲載)すると総じて、大学院に在籍する学生が学部<sup>1</sup>に在籍する学生を上回っている。また、これら大学院ではビジネスやロースクール、医学・看護などの専門職大学院が主要な位置を占める。

これらのデータは東京大学やオックスフォード大学の研究者養成機能が高いこと、これに対して、米国の私立大学が研究者を養成する文理大学院(Graduate School of Arts and Science)と並行して専門職養成の機能を大きく併せ持つことを示す。



### 客観的事実認識に基づく判断に向けて: IR (Institutional Research) の勧め

大学の基本情報から、大学の特質を分析した。分析結果の多くは、定性的に認識されている事実を定量的に裏付ける。しかし本分析から、世界の有力大学といってもそれぞれに性格が異なり、“World-class University” 標準モデルは存在しないことが導かれたように、データ分析が思い込みの事実認識を正す場合もある。このような客観的な事実認識は、大学運営において不可欠な、的確な判断を可能にする。

米国では大学のデータを収集・分析する IR (Institutional Research) が活発に行われている。当初は、政府から提出を求められるデータの収集が大学本部に設置される IR 室(Institutional Research Office)の中心業務であった。近年は大学の戦略策定のために、IR 室にデータの分析や大学執行部へのコンサルティング機能を求める動きが有力大学の間に広がっている。過去5年の間に客観的データに基づき大学運営に関する判断を行うことの重要性が大学執行部において浸透してきたという。ハーバード大学では2002年にデータ分析を担当するスタッフをそれまでのデータ収集を中心業務とするスタッフに加えて雇った。以後、スタッフは増え続け、2008年3月現在では8名の常勤スタッフを有する。学長や副学長、部局長からのリクエストに応じてプロジェクト形式でカリキュラムに関する調査や、教職員の雇用満足度調査などを実施する。的確な判断を可能とする客観的データの提示までが IR 室の業務の範囲であり、判断および意志決定は大学執行部の役割である。

ハーバード大学のような恵まれた例は稀少であろう。しかし、客観的データに立脚した大学運営の重要性は、他の大学においても変わらない。また、大学経営者に分析の視点を与える高等教育研究でも、データの積極的な活用は重要である。少子化や国際化が進み、大学が変革を迫られるこの時代において、日本の大学や高等教育研究者が積極的にデータを活用し、客観的事実認識に基づく判断を実践することを期待したい。